

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2013年5月発行～

# ひびきジャーナル



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 Tel:03-5317-0291

Fax:03-5317-0289 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

## No.36

発行日 平成 25 年 5 月 30 日  
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会  
編集 相坂政夫



新宿角筈区民ホール 3 月 16 日リハーサル

若葉青葉が目にしみる、すがすがしい季節となりました。皆様いかがお過ごしでしょうか。去る 3 月 16 日の「第二回 玉木宏樹メモリアルコンサート」には多くの方々にご来場頂き誠にありがとうございました。前回は、玉木宏樹の純正律で作曲した曲も演奏しましたが、誰でもが知っている歌、(玉木宏樹が純正律で編曲)「21 世紀に残したい歌」の中から 2 曲演奏され、歌謡曲がクラシックと錯覚するような編曲の美しいハーモニーに感動の嵐でした。次回も是非参加したいというお客様が大勢いらっしゃいました。

次回の開催は 9 月 21 日土曜日、新宿文化センター(小ホール)午後 2 時開演予定です。お友達をお誘いの上、是非ご来場頂ければ幸いです。

尚、NPO 法人 純正律音楽研究会の平成 25 年度会員を募集中です。会員の皆様のご協力により運営いたしております、よろしくお願ひ申し上げます。

## 最期の響き！

洗足音楽大学教授・ヴァイオリニスト

NPO 法人 純正律音楽研究会 代表

水野佐知香

今年7月に解散が決まっている世界の「東京クアルテット」日本公演、最後の日の銀座王子ホールでのコンサート。ご縁がありこのプラチナチケットが手に入り聴かせていただく幸運にめぐまれました。(なぜならこのチケットは5分で完売になってしまい希望されるほとんどの方が聴けなかったのです。)

この日のプログラムは、

ハイドン : 弦楽四重奏曲 ニ短調(変ロ短調) Op. 103[未完]

バルトーク : 弦楽四重奏曲 第6番

シューベルト: 弦楽四重奏曲 第15番 ト短調 Op ト長調 Op. 161. 9D887

全部の曲が作曲家最後の作品。

最後のアンコール曲は〈ドビュッシーの弦楽四重奏曲 ト短調Op. 10 第3楽章〉美しすぎるほどの音色、極上の至福の時。最後の瞬間を300人のお客様と共に迎えた。あの余韻は、空気は、片時も忘れることはないでしょう。

最終は彼らのホームグラウンドのイエール大学でのコンサートをもって本当に終る予定とお聞きしています。チャンスがあれば、ヨーロッパ、アメリカにもついていき、聴いておきたいと思うほど、彼らは解散を決めた今もすばらしい円熟期に入っているのです。

会員の皆様いかがお過ごしでしょうか？

今年は春が来ても寒く、気がついたらもう初夏！身体がついていくのが本当に大変な今日この頃です。

先日も普段は車なので気がつきませんが、歩いて出かけることがあり、鳥の声、イチョウ、けやきの新緑にうれしく思わず笑みがこぼれてしまいました。

でも、なかなか暖かくならなかったので、今年の桜は長く楽しめましたね。

さて、

世界の東京クアルテットが今年7月で演奏活動にピリオドをうち、それぞれの人生を歩むことになり、最後の日本での公演の一つであるオペラシティコンサートホールタケミツメモリアルでの演奏会も聴くことができました。「東京クアルテットが東京に帰って来た！」と2ndバイオリンの池田菊衛氏の言葉。特別な思いでのコンサートに、2000人のオーディエンスはこの最後の演奏を脳裏に焼き付けようと息を飲み聴くことに集中していました。

ストリングクアルテット(弦楽四重奏)は、我々のNPO法人純正律音楽研究会の創設者玉木宏樹も愛し、「玉木宏樹弦楽四重奏団」を作り自分で作曲、編曲し、NHK教育テレビの「ゆかいなコンサート」でも活躍していた時期もあり、ライブワークの一つにしていました。弦楽四重奏は、皆様ご存知のように音程を純正律に近くとっていくことが基本に(もちろんメロディーはピタゴラスでとっていきますが)、美しいハーモニーと、4人での対話で一つの音楽をつくっていく。大変音程を取るのに時間がかかり、音色、音楽作り等、正直、こんなにシビアで面白い室内楽はないと感じます。しかし、音楽家は個性が強く、当たり前なことですが、それぞれが自分の考えを主張し、曲を作り上げていくわけです。こだわり過ぎると先に進まないことも多く、4人で一つのものを作り上げていくということは大変難しい。それに、常に一緒にの行動をとることが多く、夫婦2人でも一緒に仕事をしながら50年近く寄り添うことが大変なのに…！44年間世界の第一線で活躍し続けているためには、大変な苦労もあったと想像しています。彼らが解散を決めた時、音楽誌はもちろんですが、ニューヨークタイムズでも4人の写真入りで大きく取り上げられました。いま、5月末ですが、7月の彼らのホームグラウンドであるイェール大学でのラストコンサートまで、韓国、ヨーロッパ、ニュージーランド、アメリカなど30公演あるそうです。世界中で惜しまれて彼らの音を聴いておきたいと、日本の公演にボストンからわざわざ聴きにこられた方もいらっしまったそうです。

しかし何と言っても、定年が決まっている職業ならいざ知らず、2011年に2ndヴァイオリンの池田菊衛氏とヴィオラの磯村和英氏が引退を決意された時に1stヴァイオリンのマーティン・ビーヴァー氏とチェロのクライヴ・グリーンズミス氏は、今まで数回メンバーが入れ替わったものの44年の伝統を持つ東京クアルテットの一員になるのに、温度差があったり、また一から組み立て直した

り、それよりも今までいた2人に勝る人を探すのには困難だし、最良な状態で長い歴史を終えるのが良いのでは…ということで、解散を決断したと！

ジャンルは違うが「山口百恵の引退コンサート」を思い出した。彼女の武道館でのファイナルコンサートは、何十年経った今でも、彼女の歌声はもちろん！しぐさ、姿まで記憶されて、今でも心の中に焼き付いている。

今回のコンサートも、観客は、引退を表明してもう永遠に聴くことができない「東京クアルテット」の音を、音楽を聴きもらさないという意気込みが感じられチケットをもぎる前からお客様の興奮が伝わってきました。

日本音楽財団から貸与されているパガニーニのコレクションであったといわれるストラディバリウスが4人の手にかかると魔法のよう！！

彼らは、一人一人が自分のパートをそれぞれ本当に伸びやかに自由に歌い上げ、それでいてすばらしいアンサンブルで4人がひとつになり音楽が進んでいく。美しいハーモニー、音色！

彼らは桐朋学園で斎藤秀雄先生の薫陶を受けジュリアード音楽院に留学をした時に、初代のメンバー原田幸一郎、名倉淑子、磯村和英、原田貞男各氏で東京オリンピックの5年後、NHKFMの放送が開始された年、1969年に結成された。翌年、最難関とされ、一位を出すことがほとんどないとされるミュンヘン国際コンクールで見事優勝！以来欧米各地から演奏依頼が相次ぎ、第一線で活躍、現在まで続いている。1ドル360円の時代、日本人がヨーロッパの伝統をうけつぐことの多いクアルテットの分野で 世界最高峰の弦楽四重奏団を維持していくためには、並大抵の苦労ではなかったと察します。弦楽四重奏団の名前もメンバーが考えた末、日本人であることがわかり、名前を覚えてもらうために日本の首都の「東京」をいれたそうである。先日の演奏会終了後のレセプションで、ある方が、「東京、日本を世界各地で宣伝し、世界中で文化交流をされた功績は大きい」とお話されていましたが、本当にその通りだと！

人それぞれ人生の節目について考え、引き際も考えなくてはならない時期に遭遇するだろう。

音楽家も俳優も芸人も普通は、舞台の上で昇天できればうれしいと言い、命のある限り演奏活動を続けようと思う方が大半。私自身も亡くなる日まで、現役でヴァイオリンを弾いていたいと思っている。

しかし、今回の彼らの引き際の良さは見習うべき、今までやり尽くし、やり遂げ、全身全霊「東京クアルテット」をクアルテット史上世界に残る名弦楽四重

奏団とした功績、そして自信！

私自身も人生の引き際、これからの人生について深く考えさせられた。  
さて、皆様は如何に？

**ムッシュ黒木の純正律講座 第 35 時限目**

**平均律普及の思想的背景について(24)**

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

原発事故はリスク管理に不慣れな日本社会において、ある意味、必然であったと言えるだろう。つまり、日本人は未だにリスクゼロの絶対安全を求めてしまう傾向があるということだ。対して、世界は機能安全の考え方に移り変わってきており、このままでは日本は世界で取り残されてしまう可能性が強いらるう。

絶対安全の思想とは、事故が全く起こらないように設計していくことである。その例として、新幹線が挙げることが出来るだろう。鉄道事故の最大のリスクは踏切での車との接触である。そこで新幹線は専用の高架を作り、踏切を完全になくしてしまった。これで車との衝突事故のリスクはゼロになったのである。後は、電車間の衝突であるが、これはコンピューターで厳密に管理をし、日本に多い地震に関しても感知次第すぐに列車を止める、などといった対策がとられ、事実、現在まで新幹線は死亡事故ゼロをほぼ実現出来ている（ただし、三島駅でドアに挟まれて動き出した車両に引きずられて死亡した事故があった）。

リスクゼロ＝絶対安全を目指し、ほぼ完璧に実現させてきた日本の技術力は誉められるべきものだろう。ところが、現在ではこの絶対安全の設計思想がネックになって日本製品が売れなくなってきたという指摘があるのだ。例えば、アメリカの電車は事故が起こることを前提に設計されている。踏切で列車と車が接触しても、列車は車をなぎ倒して進んでいく。車は大破し乗車していた人は死亡するにしても、列車のほうは脱線もせずに運行していくのだ。つまり自動車側の死者は覚悟した上で、列車の脱線による大量の事故死者数を抑える、という設計思想に基づいているのである。ここにおいてはリスクゼロ＝「絶対に安全であること」は目指されておらず、なるべく被害が少なくすること＝「リスクを認めた上でそのリスクを減らすこと」が目指されている。この思想を機能安全と言う。

というわけで、アメリカに日本の新幹線を輸出することは難しい。行政による安全基準をクリア出来ないのである。また、他の国にしたところで、絶対安全の思想のもと作られた日本製品は、事故は確かに少ないが事故が起きてしまった場合の対処法が設計されておらず、万が一事故が起きてしまったときの賠償や補償などのリスクが高いので、人気は落ちてきているというのだ。

ここまで分かっている、日本がなかなか絶対安全の思想を捨てられないのは、テストにおいて唯一の正解が設定されそれを効率よく解くことが求められる、という教育がなされているためではないだろうか？ 官僚の硬直性が最近よく批判されるが、彼ら唯一の正解を求めて育成されたシステムのエリートなので、致し方ない部分もある。著作権問題などでもそうだが、日本では当事者同士がそれぞれの利害の計算を基に話し合い妥協点を探るのではなく、官僚の「正しい指導」に従って行動することが求められる傾向が強い。このような状況下、原発事故は起こるべくして起こったのである。そして絶対安全に思想に基づいていたが故に、起こってしまった後の処理にも支障を来しているのである。

最後にリスクの語源について触れておこう。ラテン語の *resicum* は、12世紀の終わりにイタリアのピサの商人がアルジェリアから運んできた積み荷に書かれていたアラビア語の *rizq* に起源を持つのだそうだ。*resicum* は *fortuna* (運) とほぼ同じ意味で使われていた。*fortuna* が海上交易を手がける商人たちの中で使われていた航海の無事を保証してくれる神の摂理と結びついていたのに対し、*resicum* は事業の出資者に損得計算に関わる言葉だ。また、*resicum* のヨーロッパ各地への伝播はアラビア数字の伝播と平行であったという。アラビア数字とリスクはまさに商人たちの損得計算ために普及したということだ。

**連続エッセイ【外科医のうたた寝】第31話**

**ULTRA-TRAIL Mt.FUJI**

**『ウルトラトレイル・マウントフジ』**

純正律音楽研究会理事

福田六花 (シンガー・ランニング・ドクター)

純正律音楽の会報なのに僕が書くのは“走る”ことばかり。今回も走るについて書きます。

15年ほど前からランニングを趣味とするようになり、7年ほど前からランニング雑誌に連載ページを持ったり、レース・プロデュースをするようになり、走ることが仕事になってきました。そして昨年より、ものすごく大きなレースを主催することになりました。その名も<ULTRA-TRAIL Mt.FUJI>富士山の回りを1周するトレイルレースです。トレイルとは野山の道のことであり、富士山を取り囲む山々を走る161キロの壮大なレースです。制限時間は46時間、参加する選手はほぼ不眠不休で走り（一部は歩き）続けるのです。

僕は実行委員としてこのレースでは山梨県のコースディレクターと医療統括責任者を務めています。161キロのうち70キロは山梨県（90キロは静岡県）であり、山梨県内のコースはすべて僕が決めました。富士山を取り囲む美しい山々にはいくつものトレイルがあります。そのなかで最も感動的なルートをつないだつもりです。険しい山をのぼり、快適に下り、原始林のなかや湖畔を走り、様々に変化する富士山の雄姿を眺めてもらえるコースを作りました。

富士山を取り巻くのは2県（山梨県&静岡県）、10市町村におよびます。各市町に1ヶ所エイドステーションとよばれる休憩所を設けました。そこでは食べ物、飲み物の提供の他に、医療的処置やマッサージ、更には仮眠できるスペースも用意しました。食べ物は極力その土地の名物をおいて頂きました。

自分の足で10市町村をめぐり、その土地のヒトに会い、その土地の名物を食べ、161キロを走破する。これはレースと云うよりも“旅”かもしれません。

第2回目となる今年は2200名のランナーが参加しました。富士山を1周する161キロに1000名。半周（84キロ）の部に1200名。外国人の参加も多く、40ヶ国から250名（全体の12%）ものランナーが参加してくれました。

4/26~28の3日間、2200名のランナーが必死に富士山の回りを走り、1500名のスタッフがそれを支えたのでした。



**月島歌劇団**  
**【雅叙園チャペルコンサート】**

純正律音楽研究会 正会員  
(株) ABS ネットワーク  
会長 林 盛良

本年3月26日(火)、目黒雅叙園に於いて「月島歌劇団チャペルコンサート&ランチ&百段階段」と銘打って雅叙園が誇る最新のチャペルで当社主催のコンサートを開催しました。これは当社の創立10周年記念の一環として平素のご愛顧とご支援・ご協力に感謝の気持ちを込めて当社のお得意様だけでなくご家族連れなど一般のお客様にもお手頃な価格でご参加いただけるよう企画したものです。

チャペルでの1時間余りのコンサート終了後には中華コース料理または洋食ビュッフェのランチをお召し上がりいただき、「雅叙園の百段階段」の見学チケットも含まれて4500円と信じられないほどお得で贅沢なプランです。勿論、当社の協賛だけでなく雅叙園様の絶大なるご協力があつてこそ実現できた特別価格です。お蔭さまで当日は好天に恵まれ、目黒川や雅叙園の桜はまさに満開の最中、関東地区だけでなく東北や中部地方などからもご参加いただき皆様には早春の1日を満喫していただきました。

月島歌劇団は東京芸術大学卒業の若手歌手を中心に、代表者の地元でもある月島で、クラシックオペラの世界をわかりやすく親しみやすい形で公演し、皆様にオペラ(クラシック)の素晴らしさを伝えるために2009年に発足されたオペラ団体で、メンバーはソロやオペラなど内外で活躍する実力派ばかりです。地元でのオペラ公演のほかにも、ガラコンサートや各地方でのイベント出演など、幅広いジャンルで活動しています。主なメンバーは、田井中悠美(ソプラノ)・後藤真美(ソプラノ)・山田亜寿香(ソプラノ)・佐々木菜穂子(メゾソプラノ)・松井永太郎(バス)・小俣貴弘(テノール)他多数。この団体の主要ユニットである月島歌劇団 lunace(ルナーチェ)は月島歌劇団の女性メンバーによる、ヴォーカルユニット。メンバー全員が東京芸術大学出身という確かな歌声と、親しみやすいキャラクターで毎回コンサートは大盛況を呈しています。「会って話せるオペラ歌



手」をコンセプトに、若い方やクラシックに馴染みの少ない方にもクラシック音楽を好きになっていただけるようにと、堅苦しくなく親しみやすい形でクラシック音楽を楽しんでいただける公演を目指しています。

lunace が行うコンサートシリーズには東日本大震災のチャリティー公演として企画されているものもあり、その公演では毎回出演者側の収益の全額を寄付しています。プログラムもオペラ曲だけではなく、ミュージカルソングやポピュラーソングなども演奏し、バラエティーにとんだ内容で、また、曲の間にはMC で解説も行い、クラシック初心者の方でも楽しんでいただけるように工夫されています。また、コンサートで歌われる 4 声の曲アレンジ等もメンバーで行っています。

当日のチャペルは参加いただいた百十数名のお客様で丁度満席となりました。本格的な歌声でオペラ曲からミュージカル曲、ポピュラー曲など様々なジャンルの音楽をチャペルに響かせ観客を魅了しました。気のきいたトークと歌の解説を交えながら十数曲を歌い上げ最後に月島歌劇団のテーマソングでコンサートを締めましたが、あつと言う間の1時間余りでした。その後の中華とビュフェの 2 班に分かれたランチ食事会も打ちとけたムードの中、美味しい料理と歓談で盛り上がり大変好評でした。月島歌劇団のメンバーも可能な限り各テーブルを廻りながら挨拶や写真撮影にも応じていました。

お食事後は園内「百段階段」の自由見学と続けました。ご存知の方も多いと思いますが、この百段階段は東京都指定有形文化財で目黒雅叙園に現存する唯一の木造建築です。映画「千と千尋の神隠し」に出てきた湯屋のモデルとなった建物としても有名です。階段で結ばれた各部屋はそれぞれ趣向が異なり、各部屋の天井や欄間には、当時屈指の著名な画家達が創り上げた美の世界が描かれています。これらの 7 つの部屋では江戸文化の贅を受け継ぐ昭和の色彩空間を舞台にちょうどこの時期(3月19日~5月19日)創業 85 周年を記念してさまざまな流派による華道の展覧会が開催されていました。

百段階段をご堪能いただいた後は園内の桜を楽しまれたり、園内の喫茶店などで談笑されたり、あるいは目黒川の桜を観賞されたりと各自思い思いに至福のひとときをご堪能いただけたのではないかと思います。後日、今回の企画に関して多数の方から感謝と絶賛のコメントを頂戴いたしました。純正律音楽研究会の関係者の方を始めご参加いただきました皆様にはこの場をお借りして改めてお礼申し上げたいと思います。

\*参考までに当日のプログラムを記載しておきます。

♪Ave Maria(カッチーニ)

♪春のメドレー(早春賦・春の小川・花)

♪天使にラブソングをより Hail Holy Queen

♪オペラ フィガロの結婚より 二重唱

♪オペラ フィガロの結婚より 恋とはどんなものかしら

♪オペラ ジャンニスキッキより 私の愛しいお父さん

♪オペラ コジファントウツテより 二重唱

♪オペレッタ こうもりより 三重唱

♪オペラ ラボエームより 私が街を歩くと

♪Nella fantasia

♪stand alone

♪Time to say goodbye

♪オペラ 椿姫より 乾杯の歌

♪「月島歌劇団」のテーマソング



<月島歌劇団 Lunace のメンバー>

コンサートや各種イベントに月島歌劇団の出演をご希望される場合は当社ま

ご連絡ください。(連絡先：090-3131-1890 林までお願いします)

CD レビュー純正茶寮  
< Kevin Ayers >  
純正律音楽研究会理事 黒木朋興

Falling Up  
Kevin Ayers

Lable : Virgin  
CDV2510, CDV 2510



今年の2月18日、Kevin Ayersが亡くなったというニュースが飛び込んできました。私自身非常に影響を受けており、また特別な思い出のある人なので、採上げてみようと思う。とは言うものの、彼は普通のポピュラーミュージックのミュージシャンであり、純正律とは直接的な関係はない。ではあるが、生前の玉木さんとこのアルバムの最後の曲「Am I Really Marcel?」について話したことがあり、その時の思い出とともに語ってみたい。

このアルバム、やはり1992年に43歳の若さでなくなったオリー・ハルソールが参加しており、このエレキギターの名手オリー・ハルソールの良さが最も良く出ている作品ではないかと思う。

オリー・ハルソールの特徴はとにかくその早弾きにあったとされる。基本的にはブルーズのモードではあるが、アラン・ホールズワースにも勝るとも劣らない技巧を披露していた。だが、本当の彼の魅力は凄まじい早弾きのあとの、ふとスピードを落としたミドルテンポのアドリブにあったように思う。この「Am I Really Marcel?」には端から超絶的な早弾きは披露してはおらず、のっ

けからスローテンポもしくはミドルテンポのソロを展開している。それがとても美しく美しいのだ。機械の如く楽譜通りに正確に弾くというのではなく、微妙なチョーキング、ピッキングハーモニクスなどを駆使して、とにかく表現力が尋常ではないのである。

玉木さんにこの曲のことを話し、聞いてもらったところ、実はこういう何気ないメロディーをさりげなくかつ格好良く聞かせるのが一番難しいんだよね、という話になった。その時、玉木さんは是非このアルバムを研究会の会報で紹介して欲しいとおっしゃっていた。当研究会の目指すところは、何もきれいにハモらせることだけにあるのではなく、こういうところまで含めた表現力といったものに焦点を当てていきたいのだ、と。

良いですよ、とは答えたものの、結局、その約束は生前に果たすことは出来なかったことになる。オリー・ハルソールも玉木さんも、そしてケヴィン・エアーズまでこの世を去ってしまった。

### 【偶然のみちびき】 DSDその3

純正律音楽研究会 正会員  
翻訳家・きき酒師 川合 浩

ひびきジャーナルの前々号と前号では、1ビットレコーディング関係で書いてきましたが、それに関連して出会った方の中に純正律にご理解いただいている方がいらっしゃる事が分かりました。

昨年12月下旬、非接触型レコードプレーヤーのレーザーターンテーブルの営業さんから連絡がありました。渋谷東急ハンズで試聴会を開催しますが、オーディオ評論家の方も見えるのでいらっしゃいませんかとのメールでした。渋谷ならと伺ってみました。会場はディスプレイ壁面に沿う形で、レーザーターンテーブルが中央にその両側にスピーカーと、いかにも試聴会風で、客席側には中央に大きな円形のテーブルがありました。その中央の席に座っていた方が、ついその数日前の早稲田大学での1ビット研究会でお会いしていた方でした。こんなに早く再会ということで、ご挨拶し、お話してみると、その2か月前の秋葉原でのDSD DACの試聴会にもいらしていたという。そう言えばと思い出

し、秋葉の会場でお座りになって居た席まで思いだしました。名刺交換すると、オーディオ・ビジュアル評論家の麻倉怜士さんという方で、おそらくご存知の方もいらっしゃるのではと思います。

麻倉さんは AV 評論家と言う事でオーディオ関係のイベント講師もなさっていて、年が改まってからの1月の新宿ビックロでの DSD 関係のイベントに私も聞きに行きました。せっかくだからと、レコードから DSD ディスクを作って持参した所、採りあげていただいて会場で1曲再生して頂きました。

また3月にもアナログレコードから DSD ディスクを焼いて、その試聴イベントを同じくビックロで開催すると言う事で、ついでには当方所有のレーザーターンテーブルから焼いたものと言う事になりました。十数曲焼いて、その1番目には「大江戸捜査網」。

オープニングに相応しいかなと、EP 盤の B 面から録ったものです。曲目リストには、この場合作曲家名も書いておいたのですが、それを見た麻倉さんは、「玉木さんって、純正律の？」と。ご存知でした。

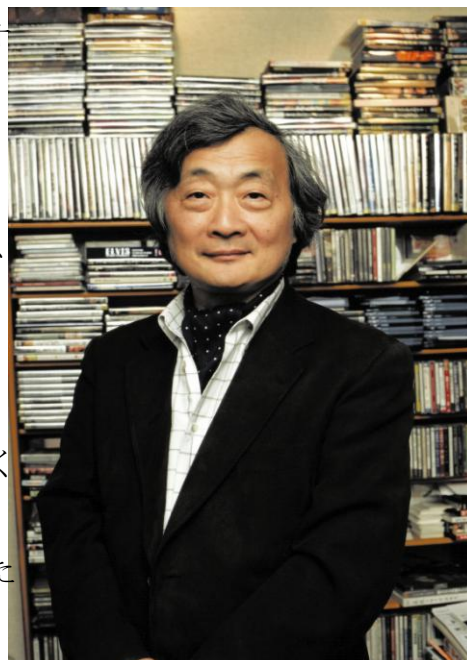
これが切っ掛けになったのかどうか定かではありませんが、その後、麻倉氏が講師をなさっている津田塾大学の講義で、今年は純正律も教えたいとツイッターがありました。ならば多少のお手伝いでも出来ればと、やりとりをしていて、参考になる平均律と純正律の比較音源をご紹介します。

そして、今回「ひびきジャーナル」に私が寄稿するに当たり、麻倉さんの純正律関係のつぶやきをまとめようかとつぶやきログを集めて、読み直していたら、どうもそのまま掲載した方が良さそうだという気になってきまして、思い切って麻倉さんに掲載の許諾伺いをした所、快諾を得ました。おかげさまで、ここに掲載することが出来る様になりました。また、学生さんからの感想文も、麻倉さんが「どうぞ。学生の感想も記したら面白いと思います。」とのことで、追加して提供してくれたものです。

では、皆様、どうぞ。

ReijiAsakura さんが、麻倉怜士氏、hiroooshi3 が私です。

-----



麻倉怜士氏(麻倉氏提供)

今日は午前はメーカーで 4K×2K テレビの指導、午後は津田塾大学で今期初講義。先週はカンヌで休講だったから、始まるのが待ち遠しかった。学生に音楽を教えるのは最高に嬉しい。すべて私の独自の切り口からだから。

2013.04.15 09:39

来週の大学授業。「ドレミの誕生」。ピタゴラスの5度によるピタゴラス律だけでなく、純正律も教えることに内容変更。となると平均律も。でも難しいから、なるべくわかりやすくが大切。 2013.04.16 23:04

しかし、教え方が難しいです。 RT @hiroooshi3 純正律も(^\_^) 平均律との比較試聴もいいですね。純正律音楽研究会元理事より RT @ReijiAsakura:

2013.04.17 10:43

そうですね。適切な CD はありますでしょうか。 RT @hiroooshi3 とりあえず、両音律での演奏音源を比較試聴してもらおうとか。 RT @ReijiAsakura:

2013.04.17 11:15

それはたいへんありがとうございます。玉木先生の CD で、水野さんのヴァイオリンのものは持っています。 RT @hiroooshi3 はい、手元にありますので、

2013.04.17 11:24

水野さん母子のヴァイオリンデュオです。 RT @hiroooshi3 えっ それはどれだろう？ RT @ReijiAsakura: それはたいへ 2013.04.17 12:04

この純正律のデュオの響きは、実にすべらかで美しいです。 RT @hiroooshi3 ありがとうございます。分かりました、いいですよ。とやや宣伝モード(^\_^) RT @ReijiAsakura: 水野さん母子のヴァイオリンデュオです。

2013.04.17 15:56

涙が出るほど美しいです。天使の音という感じで感動してきています。 RT @hiroooshi3 私からもありがとうございます。水野さんに伝えておきます。

2013.04.17 19:12

帰国。講義の資料変更でたいへん。ピタゴラスに加え、純正律と平均律も教える。 2013.04.22 12:08

いただいた比較音源で、平均律と純正律ですごく違いがわかったという感想が多いです。ありがとうございました。 RT @hiroooshi3 長3度は

2013.04.23 01:31

純正律の音色はきれいすぎて、隙が一切無いような気がします。という感想もありました。 2013.04.23 02:09

学生感想。純正律・ドレミは本当にビタッと協和し、鳥肌が立ちました。吹奏楽部で、ここは低めの音で吹いて、など同じ音でも高くしたり低くしたりして音を調整するように言われたのは、協和にズレが生じるからということだったんだなといま初めて気付きました。 RT @hiroooshi3 2013.04.25 02:35

感想→→

●ピタゴラスの音階がなぜズレるのが難しく理解に苦しみましたが、そのズレの妥協によって今私たちに身近となっている平均律ができたということに感心しました。また、音というものは1種類だけではないということに興味をもちました。今日の授業で音の歴史にふれたような気がします。

●今日の講義では、まず調和不調和の法則に驚きました。ピアノを習っていたとき、ドとソは気持ちのいい音だけれど、ドとレやドとシは気持ちが悪いな、不思議だな、と感じていましたが、それは周波数によるものだと知り、音というものは奥が深いなと思いました。また、ドレミにも3種類あるということについては、ドレミはそれだけであって種類など考えたことのなかったので、新たな発見でした。

●ドレミにもいろいろな種類があるとは、知りませんでした！平均律・ドレミは聞きなれた感じで、多少うねりがあってもあまり違和感は感じませんでした。純正律・ドレミは本当にビタッと協和していて、鳥肌が立ちました。吹奏楽部に入っていたとき、ここは低めの音で吹いて、など同じ音でも高くしたり低くしたりして音を調整するように言われたのは、協和にズレが生じるからということだったんだなと気付きました。ピタゴラス・ドレミと当時の文化や社会を照らし合わせて考えると、そこにはつながりがあるのが、面白いなと思いました。今まで音楽は感覚的で掴みどころのないものだと思っていたのですが、倍音やドレミや協和など、論理的な面もあるというのは、驚きでした。

●今回初めて、音には「周波数比率」があると知りました。ピアノやヴィオラをやっていたので、不協和音や綺麗な(聞いていて気持ちのよい)和音はなんとなく分かっていました。しかし何故そうなのかは分からず…。それには法則があったのか！と画期的でした。和音は簡単な整数比なのに驚きました。音楽や絵は感覚が占める部分ばかりだと思っていたけれど、周期比率や自然倍音の法則など、理論で説明できるものだと分かりました。理論の部分がわかると演奏するのも聴くのももっと面白くなると思うので、この一年楽しみです。

-----

## 【天才の中の天才、美空ひばり】

贋作・盗作、音楽夜話より

玉木宏樹遺作

美空ひばり(1937～1989)こそ、天才の中の天才だったと私は信じています。演歌というジャンルに留まらず、すべてのジャンルを越えての天才だったと思います。私はコロムビアレコードのオーケストラの一員としてヴァイオリンを奏き、ただ一度ですが美空ひばりの歌の録音に立ち会い、恐るべき体験をしたのです。彼女は楽譜を読めないし、音楽的知識もあまりなかったようで、そのことで彼女のことをバカにする人も多かったのですが、どっこい、彼女にとっては楽譜が読めるかどうかは全く意味のないことでした。

彼女は私の6歳年上ですが、子供の時から彼女の歌声は、ラジオ、映画でよく聴いていました。子供心でも、なんだか大人びた歌い方をするおませな女の子としか映らず、それほど好きでもなかったので彼女の存在は私には全く無関係でした。そんな私も芸大のヴァイオリンに入学しましたが、クラシックの道には進まず、当時、商業音楽では超売れっ子だった山本直純の工房に入り、クラシック以外のことをたくさん学び、いい勉強になりました。また直純さんの仕事の合い間をぬって、スタジオプレーヤーとして、いろんな場面でヴァイオリンの演奏のアルバイトをやりました。これがまた、貴重な得難い体験で、直純さん以外の作曲家、編曲家の仕事ぶりを目のあたりにするのは、いろんな蓄積に非常に役立ちました。

そんなある日、私は××時に赤坂のコロムビアレコードへ行くようにとマネージャーから言われ、行ったんですが、フリーミュージシャンの呉越同舟のオーケストラですから、行ってみないことには仕事の内容は一切わからないのです。当時の歌もののシングル盤レコーディングは1曲の空オケ録りが1時間、A.B両面だと2曲で2時間というのが殆ど決まりなのです。演歌だろうとポップス系だろうとかわりません。しかしそのとき不思議だったのは、3時間拘束だったことです。でも3曲分もらえるんだったら文句はないと思いスタジオに着いてみると、譜面は1曲しかありません。で、誰の歌の録音なの？と訊くと初



めて、美空ひばりの仕事だということが分かったのです。しかし1曲に3時間というのはさすがにひばりさんだけあって予算があるんだ、くらいにしか思っ  
ていませんでした。そして最初の1時間はアレンジ譜の確認と、空オケのバラ  
ンスを作って行くのです。あまり難しい譜面じゃないので、試し録りなんかや  
ったりして何だか時間かせぎのようなことをしている内、1時間がたちました。  
するとスタジオの外の方から拍手がきこえてきました。なんとオジョー(美空ひ  
ばりのこと)の登場です。普通の空オケ録音の時は殆ど歌手はきませんし、きた  
としても、こんな大ゲサな登場ぶりはしません。そしてオジョーはやおらオケ  
に向かって言いました。「みなさま、お待たせして申し訳ありません。今から歌  
のお稽古をしますので、みなさん小一時間ほどお休み下さい」。オケはパラパラ  
と拍手しながら、みんなイソイソとスタジオを出ます。自らを「楽隊」と呼ぶ  
連中ですから、すぐにカーポ(ポーカ)の修羅場になります。もちろん私も誘わ  
れたのですが、私はオジョーの歌のお稽古にとっても興味があったので、断りま  
した。そして稽古の進行を眼を凝らして見ていると、オジョーは座付きピアニ  
ストに言います。「ねえ、どんなメロディ？弾いてみて」。えー！私はブツたま  
げました。何とオジョーは事前に新曲のメロディを知って練習してきたわけじ  
ゃなく、録音現場で初めてメロディを聴くのです。ピアニストは少し解説しな  
がら、ワンコーラスのメロディを弾きます。するとオジョーは「分かった。歌  
ってみるわ」といって、いきなり歌い出すのです。そして歌い終わるとピアニ  
ストに「どう？」と訊きます。ピアニストは、細かい所の違いを指摘します。  
するとオジョーは「わかった。じゃ、もう一回やるから」と言って歌うと、も  
う完璧です。実に私は度肝を抜かれ、悪い夢でも見ているような気分です。こ  
んなに覚えが早いのなら、楽譜が読めなくても何の問題もないのです。当時は  
メロ先なんて作り方はしませんから、オジョーも新しい詞を見ながら、ある程  
度の予想はしていたのかも知れませんが、それにしても、これは神業に近いこ  
とです。あとは、2コーラス3コーラス目の詞の字足をそろえる練習だけ。それ  
も簡単に終わります。「みなさん入れて」のオジョーの声で、オケがゾロゾロと入  
ってきます。この後がまた仰天ものです。もう当時は、オーケストラでも楽器  
ごとに重ね録りするの当たり前でしたから、歌手はでき上がった空オケ相手  
に何度も納得するまで歌うというのが常識でしたが、オジョーは全く違い、小  
さなブースに入って、我々のオケと一緒にうたうのです。そして、2.3回テスト  
したあと、すぐに本番です。そのうまいことは全く鬼のようです。テイクワン

が終り、オジョーが「どう？」と訊くと、ディレクターから「ここと、ここが少し気になるのでもう一度お願いします」との答え。オジョーは「あっそう」と全く動じる気配もなくまた歌い終わり、オーケストラの前で深々とお辞儀「みなさま、ありがとうございました」との御挨拶で晴れて録音完了です。それ以前にもそれ以後にも、相当才能のある人たちともつきあいましたが、オジョーほどの才能には会ったことがありません。昔は、こんな人もいたんだなあ、と実に懐かしい思いに駆られます。

「贋作・盗作、音楽夜話」2010年著

★4月22日発売、純正律音楽の新刊、福田六花著

「聴くだけで、ぐっすり眠れて、すっきり起きられる！ 純正律音楽」

聴くだけですーっと入眠でき、すっきりと起きられる、純正律音楽のCDつきムックです。普段わたしたちが耳にしている「平均律」とは違う、濁りのない澄んだメロディーが、脳を究極のリラックス状態へ導き、自律神経を整え、心地よい眠りへ誘います。

価格 1,260円(税込) 宝島社刊



今後のスケジュール

2013年9月21日土曜日 13時30分開場 14時開演

♪世界を救う♪【純正律音楽コンサート】

会場：新宿文化ホール(小ホール)

JR/京王線/小田急線 新宿駅東口 徒歩15分

東京都新宿区新宿6-14-1 TEL. 03-3350-1141

出演：水野佐知香(ヴァイオリン)、三宅美子(ハーブ)、吉原佐知子(箏)、

入場料：3,500円(会員特別価格3,000円)



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

<http://just-int.com/>

平成 25 年 5 月 30 日 発行責任者：NPO 法人 純正律音楽研究会

編集：相坂政夫